



Title	ヨーロッパの「老い」 : スーパーマーケットの虫眼鏡 : スイス編
Author(s)	堀井, 富士子
Citation	大阪公衆衛生. 1987, 51, p. 28-29
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83943
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ヨーロッパの「老い」

ー スーパーマーケットの虫眼鏡 ー

～スイス編～

大阪府藤井寺保健所長 堀井富士子

自由と平和と永世中立国のスイス。6月27日スイス航空831便は、右も左も一面白銀の峰アルプスの山々の歓迎の中を飛んでジュネーブのコアントラン空港に我々を運んでくれた。

出迎えの専用バスでWHO（世界保健機構）へ直行。Dr. 川口から「WHOの現在の動き」と題して、済・社会の両面の弱者が社会参加しうる「健康」を世界中にもたらそうというヘルス・フォー・オールへの努力を聞いた。そのあと館内見学。最後に上がった屋上からのすばらしい眺めは格別であった。天空に美しい線を描いているアルプスを背にした緑の森の中には、1929年に建てられたPalais des Nations(国際連合欧州本部)、ILO(国際労働機関)、CICR(国際赤十字社)、GATT(国際貿易社)、ITU(国際電気通信連合)など世界レベルの組織本部がWHOと軒を並べていた。

暗い歴史

ジュネーブは首都ではないが、アルプス山系最大の湖レマン湖をもち、国際会議が一年中開かれているため世界各国からの貴賓客用高級ホテルが湖岸に立ち並ぶ、白銀に輝く名峰モンブランの美しい姿をバックにした、世界一の150mの噴水には虹がかかり、モンブラン橋から湖岸にかけて夜おそくまで絶好のプロムナードである。(日没10時30分)

ここの美しく清らかで静寂な眺めは、文明文化に疲れ果て、狭い枠の中で弾力を失ってしまった人の心をいやしてくれる何かをもっている。だから世界中の人々がひきつけられるのであろう。

しかし現地の通訳さんから聞いたスイスの歴史は暗く悲しいものであった。山と湖の自然に恵まれてはいたが、かつては何の生産性もなく、国は貧困にあえぎ国民の血液を輸出して食料を求めてきた。

また中世から近世のヨーロッパは戦いのあけくれで、成人男子はスイス山岳兵として勇敢で勤勉であったために、各地の宮廷や貴族・諸侯にやとわれていったのである。当時の州財政を維持するためにしかたがなかったのだそうだ。今もルツェルンに残る「瀕死のライオン」という記念碑は、フランス革命で殉死したスイス兵の暗い悲しい歴史を忘れまいとして国民の前に飾られている。

世界一の金持になっても

スイスと時計のかかわりは、16世紀中頃の宗教改革のあらしの中で、ヨーロッパ各地で迫害を受けた新教徒がジュネーブに集まってきて、その中に時計職人がおり、地元の人に時計作りを教えたことにはじまる。人々は息子を傭兵にとられるよりはと時計作りに励み、家内工業として周囲にも広がり、国の大産業に育っていくことになった。

現在、職人的手づくりの良さとデザインの素晴らしさで世界第一位、年間7,000万個の生産をあげている(日本、第2位年産3,000万個)。そしてまた「銀行法」を制定し、国をあげて個人の財産を守り、利益をあげる運用をしているので世界中からお金が集まってくる国になった。

現在大小あわせて1,650の銀行があり、本店・支店をいれると4,500店になる。人口1,400人に1つ銀行があることになる。そのうえ資産総額は1,000億ドル、有価証券は2,000億ドルで1人あたり1,500万円と

いう世界一の資産家になったというわけである。スイスフランは政治・経済が安定しているので不動産の通貨であるそうだ。

モンブラン橋のたもと、メインストリートの一等地にひととき目立って、アラブ・バンクの字が目に入る。石油王一家と思われる大家族集団（20人位）にレストランで出逢った。「古い」も「ベビー」も大きな美しい黒い瞳をもっていた。この人達は一生遊んで生活しても使いきれないほどのお金があつた銀行に入っているんだろうなあと思ひながら、スイスフォンデュとまづいパンを食べた。

こんな金持のスイス人が毎日まづいパンを食べている話、それは常に国民 640 万人の 2 年間分の食料を山に備蓄しており、それを古い方から順次流通させるから、古い古い小麦粉でパンを焼いているためなのだそうだ。スイスの女の子は義務教育で主婦としての役割りを十分に教育される。その中の一つに常に各家庭では家族の 3 週間分の食料を保存すること（各家庭は必ず防空壕があつてそこが平常食料庫）を教えられ、日常生活では母親もそのように娘にしつけている。

スイスは山国であるから、小麦は輸入に頼っている。輸出するフランスは新しい方から食べて古い順に輸出にまわす。美味を追求するフランス人とは実に対象的で、幼い時から「備えあればうれいなし」

耐えることを教えるスイスのお国柄をうらやましく思へたのは、当方も戦争を知っていたから——「古い」なのかもしれない。

豊かな「古い」

スイス国民は 18 歳になると登録し 20 歳すぎると学生でも年金を掛ける。一般就労者は給料の 10.3%（うち半分は事業主）、自営業は年収の 9.4%、無職は貯金額で認定し最低の人で年 250Fr. を支払う。

支給は男 65 歳、女 62 歳になると老齢年金として家族もちが従来の収入の 80%、単身が 70% と老後の生活水準を維持する所得保障がされている。若い時から勤勉に働いて豊かな老後にそなえるのがあたりまえなのである。世界一の資産家になった今でも過去の暗い苦しい歴史が人々の心に生きており、今の日本の姿を思い出してはすかしかった。

65 歳以上老人の 10% 近くは老人ホームに入所し、あとは自宅に居る。在宅の病弱老人へは訪問看護サービスが行われており、州の依頼をうけてすべて地区赤十字が実施。その経費は国が負担している。その他、デイ・ホスピタル・デイ・ケア、在宅看護、在宅リハビリテーション、ヘルパーサービス、給食サービス、洗濯サービスなどきめ細かくおこなわれており、これから深刻さを増す老人国への備えがされてきている。

1980 年世界第 12 位であつた老人人口割合が 2000 年で世界第 4 位、2025 年世界第 1 位になる国連推計が出ているし、医療の高度化、医療費の高騰にはこの国でも検討が続けられている。健康保険はすでに 20% の自己負担が必要になった。特に近年は高いコストの検査が多くなり、国としては自然な医療を回復したいと考えているがむずかしいらしい。

氷河とぬくもり

快晴の日シャモニーからロープウェイで 3,842m に数十分で登ってしまった。紺碧の空の下、氷河と雪山の大パノラマの中で 4,807 m のモンブランの威容におどろき、酸素不足で「古い」の心臓をキュンキュンいわせて帰ってきた日の夕暮のことである。レマン湖畔を背すじがピンとのび白髪が一層風格を高めている紳士が、足の弱い御婦人の手をとって歩いていた。

小さな歩調でゆっくりとした散策。何故かしら追いこせなくて、二人三脚そのもののいたわりあう「古い」に魅せられて、私達は同じ小さな歩調で黙って、ついて行った。

モンブランの氷河とあたたかな夫婦愛を身近に経験したすばらしい 1 日であつた。